

論文——シンポジウム「移民への錯綜する眼差し——排除と寛容のはざままで」

チャイナタウンを物語る ——「オリエンタルなロンドン」の誘惑

田中 孝信

私はトマス・パークの『ライムハウスの夜』を読んで感動した。[……]
スラムには美があるのだ！——汚穢と惨めさにもかかわらず美を見る
ことができる人々には。そこには、お互いに反応し合う人々がいる
——まさに人生がある、そしてそれこそが全てなのだ！（Chaplin・太
字は原文大文字）

1. イギリス人の中国人観

ロンドンの中国人街と言えば、多くの中華レストランが軒を連ねるソー
ホー地区を思い浮かべる。しかし、第二次世界大戦まで中国人の主たる居
住地はイースト・エンドのライムハウスやペニーフィールドの狭く薄汚い
通りだった。1860年代以降、イギリスと極東との交易が盛んになると、蒸
気船会社は中国の条約港で何百人という中国人と契約し船員として雇い入
れた。兵士や事業家たちが中国や極東でのイギリスの利権を守るため、あ
るいは拡大するためにライムハウス・リーチから出発する一方で、イース
ト・エンドはインド人、マレー人、中国人の流入でコスモポリタン化した
のだった。そして、ライムハウス・コーズウェイやペニーフィールドに、
小さなチャイナタウンが形成されたのである【図1・2】。定住した中国人は、
食料雑貨店、食堂、洗濯屋、船乗り相手の下宿屋を営んだが、言語や文化
の違いゆえに周囲から孤立していた。



A CHINESE SHOP (LIMEHOUSE).

図1 A Chinese Shop
(Limehouse), 1901

図2 A Chinese Shop, 1927

彼らの数は、アメリカやオーストラリアの中国人移民に比べればわずかだった。1877年にサンフランシスコだけで35,000人、ニュー・サウス・ウェールズ1州だけで17,000人だったのに対して、イギリス全体でも、20世紀まで彼らは3桁にとどまっていた。1911年の国勢調査段階でも1,319人で、そのうち480人が船乗りだった。地理的に見て中国人は主としてロンドンとリヴァプールに集中していたが、数としてはわずかで、1911年にロンドンで247人、リヴァプールで403人だった (May 112 and 122)。ライムハウスの中国人人口に限って言えば、第二次世界大戦前のピーク時である1921年でも337人であり、これは1911年の101人に比べると増加であり、ライムハウスの中国人だけでロンドン全体の中国人の半分を占めていたわけだが、数値は取るに足らないものだった (Seed 63)。しかし、そのちっぽけな規模にもかかわらず、阿片戦争以来の罪悪感ゆえに、逆侵略の脅威に怯えるイギリス人は、中国人移民を阿片と結びつけ、墮落をもたらすものと見なしたのだ。ライムハウスの中国人神話は、その現実の姿より遥かに増幅されたのである。そうした否定的な捉え方が最高潮に達する契機となったのが、1899年に勃発し、翌年北京の外国公使館区域を包囲した義和団の事件だった。このとき初めて「黄色の脅威 (Yellow Peril)」という

言葉がイギリスでも用いられる。*OED*は初出として1900年7月21日の『デイリー・ニュース』(*Daily News*)紙を挙げている。事件のさなかの1900年7月2日にウィリアム・T・ステッド(William Thomas Stead, 1849-1912)創刊の『評論誌の評論』(*Review of Reviews*)誌が指摘したように、「極東で血塗られた黄色の問題」が今や、「少なくともミニチュアの形で、それも本国に遥かに近い『現場で』注意深く観察できるかもしれない」(51)のである。

具体的には、中国人移民は、阿片吸飲と賭博以外に二つの点で問題を引き起こした。一つには、彼らは低賃金で働いたために、イギリス人の仕事を奪ったのだ。1878年11月22日の『タイムズ』(*The Times*)紙は、「ヨーロッパのなかの中国人」(*The Chinese in Europe*)という記事で、ヨーロッパへの寄生という観点から、そして労働者階級の潜在する怒りを刺激するものとして、中国人をユダヤ人と明確に結びつける。

[……]それほど遠くない将来、中国人問題は、現代のアメリカ同様、ヨーロッパにおいても喫緊の課題となるだろう。中国の孤立というのは、過去の事柄だ。50年経てば、蒸気船は中国人を信じられないような低価格で世界中に運ぶだろう。私たちは、ヨーロッパの都市に中国人地区が形成されるのを目にすることになる。そしてそれは、労働者階級の間に不満を引き起こし、彼らと中国人は真剣に向き合わなければならなくなるだろう。中国人という要素は、結局最後にはユダヤ人のように私たちのなかに住みつくことになるのである。(11e)

中国人に対する、反ユダヤ人感情と同種の不安感、彼らが住む地区にはびこる犯罪と堕落ゆえにますます強められたのだった。

もう一つの問題は、中国人男性と白人女性との性的関係だった。1911年の調査によると、ロンドンの中国人女性の数は中国人男性の220人に対してわずか27名だった。それゆえ中国人男性は現地の白人女性と結婚しようとしたわけだが、そうした事実は無視され、両者の関係はセクシュアリティ上の境界侵犯と見なされたのである。1901年2月の『ブラックウッド・エディンバラ・マガジン』(*Blackwood's Edinburgh Magazine*)誌に掲載された「外国からの好ましくない者たち」(*Foreign Undesirables*)という記事は以下のように述べている。

スラムが細長い目をした混血児を生み出すことになるかどうか考えてごらんなさい。ミスタ・アーノルド・ホワイトのこの問題に関する率直な発言を私たちはことさら称賛する必要はないが、彼は先日警鐘を鳴らしたのだった。合衆国は何とか手遅れにならずに「黄色の脅威」を撃退した。オーストラリアもそうだった。次は私たちの番かもしれない。それゆえあらかじめ備えようではないか。(289)

特に中国人男性の白人少女嗜好は、阿片売買以上に問題とされた。1907年に リヴァプール市議会調査委員会は、以下のように報告している。

「証拠によれば、中国人は若い少女、なかでもとりわけ過度に早熟な少女たちと性的関係を持つのを大いに好んでいるようである。[……]

「3つの事件を警察は知るところとなったのだが、刑事上の捜査を開始するには余りに遅すぎた。すなわち、事件が起こってから6ヵ月以上が経過していたのである。これらの事件では、誘惑された少女たちは当時16歳以下だったようだ。[……]

「中国人が少女たちを誘惑した証拠は決定的である。[……]」(May 114)

マスメディアは、公的調査書によって実証された事実として、白人少女の肉体に異常な性欲を覚える中国人男性像を拡散させ、社会の不安や恐怖をあおることで、販売部数を伸ばしたのである。

このように中国人を負の価値を持った別個の存在と見なす姿勢とは対照的に、イングランド人女性やアイルランド人女性と結婚した中国人男性を、地域社会に溶け込んだ尊敬すべき人物と捉える動きもある。1900年7月にジョージ・A・ウェイド(George A. Wade)は『イングリッシュ・イラストレイティッド・マガジン』(*The English Illustrated Magazine*)に掲載された「コックニー・ジョン・チャイナマン」(“The Cockney John Chinaman”)のなかで、次のように述べている。

しかしながら、全体的に見て、ライムハウスの中国人は非常に平和的で、不快感を与えない、害のない人物である。彼は隣人たちと仲が良く、彼らのほとんどが彼のことを良く言っている。彼は悲しいまでに殺風景な地域

では絵画的ですらある。彼の住む通りは、この国では独特のものである。地域の住民は中国人がいることに多少なりとも憤慨しているのではないかと思われるかもしれないが、概して、ライムハウスは彼がいることを誉めるとむしろ自慢していると言わざるを得ない。(307)

さらに同時期、カウント・E・アームフェルト (Count E. Armfelt) は、「オリエンタルなロンドン」(“Oriental London”) という小論のなかで、結婚生活自体も両者にとって満足すべきものであると報告している。

全ての定住した中国人男性はイングランド人女性と結婚している。その結婚には何ら問題はなく、幸福に暮らしているようだ。彼らの子どもたちは健康そうに見え、身だしなみもよく、ほとんどの子どもが見た目にも大変気持ちがいい。これら黒髪で黒い目をした少年少女たちが、バラ色の頬をして幸福そうな顔つきをしている様は、実際のところ、ちょっとした絵画とも言えるものだった。(84)

ウェイドやアームフェルトの説には、従来の出版物が「中国人」という抽象的な像に囚われていたのとは異なり、義和団事件にもかかわらず、中国人を個人および集団として、その性格を具体的に記述しようとする姿勢が窺える。

中国人に対するこうした相反する姿勢は、当然大衆文学にも反映されてくる。作家たちはイースト・エンドの知られざる世界を描き、「オリエンタルなロンドン」の謎と危険を利用して一種のオリエンタル・ゴシックを創り出したのだった。実際、19世紀後半の文学作品やルポルタージュでは、阿片吸飲と結びつけられた中国人移民は、チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens, 1812-70) やジェイムズ・グリーンウッド (James Greenwood, 1832-1929) に見られるように、白人女性を墮落させ「中国人化」をもたらす存在として描かれる。その流れに沿って、1913年に第一作目が刊行されたサクス・ローマー (Sax Rohmer, 1883-1959) の「フー・マンチュー」シリーズ (“Dr Fu Manchu” Series, 1913-59) では、中国人に対する社会の不安が、人種的ステレオタイプに則って描き込まれる。それに対して1916年に出版されたトマス・バーク (Thomas Burke, 1886-1945) 【図3】の短編集『ライムハウス

の夜』(*Limehouse Nights: Tales of Chinatown*)【図4】の幾つかの短編には、中国人男性と白人女性との関係が肯定的にすら提示されている。ローマーが、白人女性への邪悪な中国人の関心は、西洋を破壊せんとする黄色人種の悪魔のような計画の一部であるとする当時の恐怖心を強めたのに対して、バークの物語は、両者の関係を通して、ロンドンの中国人地区にロマンスを付与する。1916年9月28日の『タイムズ文芸付録』(*The Times Literary Supplement*)紙が彼をイースト・エンドの混淆性を推奨する「騒々しい扇動者」(464)として非難したことからも明らかなように、作品は、社会通念を逆なでするものとして悪評を買う。それにもかかわらず、ローマー以上に多くの読者を魅了したのだった。



図3 Thomas Burke, 1931

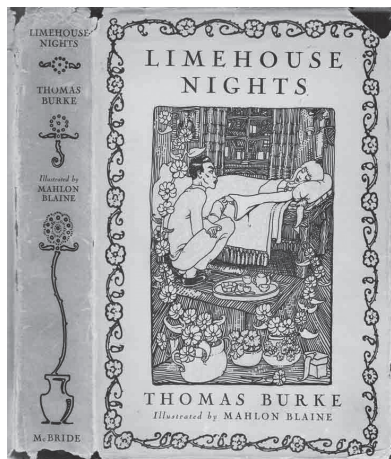


図4 *Limehouse Nights*, 1926

しかし、『ライムハウスの夜』は一夜ではなく幾夜も扱う、その地区の日常生活を捉えたアンソロジーであることを忘れてはならない。D・W・グリフィス (David Wark Griffith, 1875-1948) 監督によって1919年に映画化された『散り行く花』(*Broken Blossoms*)【図5】が多大な成功を収めたせいで、批評家たちは、その元となった「中国人と子ども」(“The Chink and the Child”)に注目するあまり、中国人男性と白人女性の性的関係を肯定的に

捉え、他の多くの物語に見られる憎しみや復讐をも含めた感情を包括的に分析する姿勢を欠いているように思える。¹ そこで本論では、異人種混淆を短編集全体のなかで捉え直してみようと試みる。そうすることで、パークの中国人観や、彼が作品に込めた意図を明らかにすることができるだろう。



図5 *Broken Blossoms*, 1919

2. 中国人男性と白人女性の愛憎関係

『ライムハウスの夜』でもっとも物議を醸したのは、中国人男性と白人女性との性的関係だった。特に、異人種混淆のみならず小児愛・サディズムといった性的倒錯や家庭内暴力を含んだ煽情的な物語である「中国人と子ども」では、中国人の少女趣味や1890年代のデカダントたちのエロティッ

クな子どもへの関心を反映して、ヒロインのルーシーは「純潔」から「汚辱」への危険を秘めた14歳の少女として登場する。非道徳な空間のなかで、優しさ・穏やかさ・受動性・女性性を帯びた中国人男性チョン・ファンは、彼女を虐待する育ての父「拳闘家パローズ」が与えなかったもの全て、すなわち安全で、慰めと愛情に満ちた家庭を提供する。チョンには代理父というよりは、「毎夜彼は、母が子にするように、彼女の世話をした」(29)とあるように、母親の役割が重ね合わされているのである。両者の関係に小児愛が読み取れるのは事実だが、彼の愛は本質的に「純粋なもの」(26)として提示される。

ではなぜパークは、女性的な性質を帯びたチョンのような人物を物語中に持ち込んだのだろうか。ジャックソン・リアーズ(T. J. Jackson Lears)は『神の恩寵の消滅』(*No Place of Grace*, 1981)のなかで、ヴィクトリア朝の産業化と中産階級文化に対する幻滅が、一部の知識人をオリエンタリズムや中世主義信仰に走らせたと述べている。

人気があるオリエンタリズムは非体系的で多様なものだった。信奉者たちは、彼らが奉じていると主張する伝統を知らないこともしばしばだった。東洋の神秘主義に対して現代見られる関心の高まりと同じく、19世紀後半のオリエンタリズムを異国趣味の浅薄な形での実践と見なして退けてしまうことは容易だろう。しかし、そうするのは間違いではないだろうか。現代同様当時も、東洋の宗教の人気は一時的流行以上のものであることを示した。[……] オリエンタリズムは、精神療法運動や、ヨーロッパの民族精神への憧れや、中世の神秘主義への回帰と同じように、19世紀後半の精神的動揺への一つの反応だったのである。(175)

「過度に文明化された」西洋がもたらした害悪への幻滅から東洋を、世紀の変わり目に多くのボヘミアンたちは西洋に対峙するものとして理想化したのだった。この幻滅から生じた静寂主義や無活動や平和主義こそが、チョン像に体现されているもののなのである。したがって、彼の親切で優しいといった女性的な特質は中国人の男性性への中傷ではなく、肯定的に捉えられるべきもののなのである。そして、これは現実の中国人男性の性質がどうかという問題を離れて、オリエンタリズムといった当時の社会的関心とよ

り結びついた動きなのである。

この優しい中国人男性と十代の少女との関係というのは、「ヨートーの父」(“The Father of Yoto”)でも繰り返される。主人公のタイ・リンの魅力は、麻薬や金銭で白人女性を誘惑するといった世間に流布する中国人像とは異なり、優しさ、詩的センス、それに、「イングランドの『淑女』を取り巻く冷たい銅鉄製の防御物をも打ち砕いだろう」(46) 微笑みにある。一方、日銭を稼ぐために売春をする早熟なヒロイン、マリゴールド・ヴァシロフは、大人の女へと変化する過渡期ゆえの「すばらしく愉快的少女」(41)なのである。彼女の妊娠騒動に際して、中国人3人と白人1人が父親だと名乗りを上げるが、結末では、生まれてきた「アーモンド形の目をした黄白色の」(55) 赤ん坊が間違いなくタイの子どもであることが明らかになり、二人には幸福な家庭空間が用意される。

こうした恋する中国人男性と白人少女に対置されているのが、労働者階級の白人男性である。チョンは、サディスティックな性欲に駆られて娘を鞭打って死に至らしめるバローズよりも、またタイは、生まれてくる赤ん坊の父親だと喧嘩っ早い態度で主張するボクシングの興行者チャック・ライトフットよりも、精神的に優れた存在として提示されている。感傷的で美的感覚を備えた中国人男性を通して、パークは労働者階級の白人男性が帯びる野蛮で暴力的な男性性を退化としてアイロニカルに提示する。彼の姿勢は、世紀転換期におけるマッチスモ信奉に疑問を投げかけ、新たな可能性を女性性やオリエンタリズムに探るものと言えよう。

両作品に見られる白人男性の退化という現象は、「手」(“The Paw”)においては、主人公の白人男性グリーサー・フラナガンの娘マートルに対する鞭打ち行為に、さらに強烈な形で具象化される。彼は、妻ダフォディルを中国人男性ブン・チンに寝取られた復讐のために、幼い娘マートルを暴力によって洗脳し殺人機械に仕立て上げるのだ。彼女の体に鞭を振り下ろすとき「叫び声と喘ぎのたびに彼はぞくぞくするような恍惚感を覚えた。それから、彼女の服を脱がせ、部屋中追いかけて、失神するまで鞭打った。そして彼自身も嵐のような冒涇感に襲われ」(85)るのである。このとき中国人は、グリーサーのような男の最悪の部分を引き出す触媒の役割を果たす。中国人と結びつけられイギリス人の道徳心をむしろむとされた阿片も、グ

リーサーがそれを多量に摂取することで、彼自身が潜め持つ残虐性を顕在化させているに過ぎない。「拳闘家バローズ」の暴力性と合わせて考えるとき、労働者階級の男性性は、自らの不節制やそれを引き起こす原因と考えられる劣悪な社会環境のせいで、退化の危機的段階に達しているのである。それに対して中国人の男性性は、グリーサーの嫉妬心をあおるプンの「レモン色の手」が、「ダフォディル」[ラッパスイセン。イギリスの春を代表する草花で、淡黄色の花を咲かせる]という名前やマートルの「レモン色の巻き毛」が帯びる色と共通性を持っている点に着目するならば、この物語から判断する限り、白人女性の側に立った、健全で共感を呼ぶものとして提示されているのが分かる。もちろんパークは、フラナガンというアイルランド系の名前を用いることでイングランド人とは一線を画し、白人男性と中国人男性の対立を人種的他者同士の争いの枠に押し込んでいるが、少なくとも、イースト・エンドの中国人が白人女性を墮落させるという固定観念が否定されているのは確かである。²

ただ、中国人男性と白人女性の関係は相思相愛の恋物語だけではない。両者の間には性を介在させた、せめぎ合いもまた描かれているのだ。その描写には、ローマーも用いているような、中国人男性に関する多くのよく知られたステレオタイプが反映されており、パークも決して二項対立的な構図から免れているわけではないことが窺える。彼らは物質主義者であり「超道徳的」である、彼らは「少女の美を愛する」、彼らは快楽を追求するが営利本位である、物憂いがそれでいて勤勉である、感情的に「未発達」だが巧妙で悪賢い、優しい恋人であるが性的に墮落している。白人男性の暴力がボクシングや打撃によるのに対して、中国人の暴力はより巧妙で間接的である。特にパークの物語では、白人男性を攻撃する際の方法は、女性登場人物が用いる方法に似通っている。白人男性が拳を用いるのに対して、中国人男性は毒薬・欺瞞・注意深く画策された罠を用いるのである。中国人男性に付与された、そうした相反する性質や女性性を反映して、白人女性との関係も様々なのである。

両者の関係の根底には、中国人に対する住民たちの人種差別意識がある。『ライムハウスの夜』の共同体では、社会的優劣を決定する際に人種が最も重視される。したがって、中国人であるというだけで低い地位に置か

れることになる。「地上を這う全てのもののなかで最も狡猾なのは、西洋の東洋人」(30)なのである。その中国人が富を握り白人女性を誘惑し墮落させる。地位の下の人に評判を傷つけられた白人女性の方は、それを侮辱と捉え報復を企てる。中国人食料雑貨商カン・フウ・アーの店で働くグレイシー・グッドナイトは、彼の軽蔑的な扱いに腹を立て、「偶然」を装って店ごと彼を焼き殺してしまうのだ(「グレイシー・グッドナイト」“Gracie Goodnight”)。母の葬式代を工面するために脂ぎった忌まわしい老人タイ・フに身を売ったがために売春婦にまで身を墮したパンジー・グリアーズは、トリカブトの毒で復讐を果たす(「タイ・フとパンジー・グリアーズ」“Tai Fu and Pansy Greers”)。逆に中国人男性がふられたのを根に持って白人少女に復讐する場合もある。空中ブランコ乗りのジューウェル・エンジェルに「黄色いネズミ」(102)と蔑まれふられたチョン・ブランダーは、腹いせに彼女の相方である恋人を事故に見せかけて死に至らしめる(「キュー」“The Cue”)。スウェー・リムは、愛するポピー・スターディッシュが警察のスパイとは知らずに不法賭博の情報を与えたために捕まり、その裏切り行為に対する意趣返しに、彼女の恋人である殺人犯の居場所を警察に伝える(「ランプの合図」“The Sign of the Lamp”)。

そして、『ライムハウスの夜』の最後に置かれた「オールド・ジョー」(“Old Joe”)には、それまでの物語に顕著であった主題の多く、すなわち中国人の白人少女への性的欲求や姦計、労働者階級の白人男性の退化が見て取れるのである。物語は、先の世代の白人イースト・エンダーの力強い男性的な道徳性と若い世代の心身ともに虚弱で退化した様とを比較する。かつて「ロンドン・ドックスで最強の男」(302)だったジョーは、娘を凌辱した中国人と、ギャンブルの借金の返済のために3ポンドでその仲介をした義理の放蕩息子に対する怒りから、年齢と病気のせいで失われていた力を取り戻す。そのとき、イースト・エンドの道義をわきまえた雄々しい男性性は劇的に再生し、中国人の墮落を罰し、身体的にも精神的にも退化した男性子孫を懲戒するのである。しかしながら、ジョーはあくまで旧世代に属する人間であり、その力の復活に永続性があるとは思えない。それゆえ、イースト・エンドの男性性の健全な回復・発展にパークが楽天的なヴィジョンを持っていたとは考えられない。

3. 『ライムハウスの夜』における逆さまの世界

では、なぜバークはこうした矛盾する様々な物語を一冊の短編集のなかに入れたのであろうか。その理由を探るには、作品の出版時期が第一次世界大戦さなかの1916年だったという点に注目しなければならない。彼は『私の時代のロンドン』(*London in My Time*, 1934)のなかで、大戦前のロンドンについて、地域性の強い孤立した島々から成る集合体だったと述べている。

その当時、各地域は際立ってそれ自身であった。小さな島々には様々な外国の水が打ち寄せたが、内陸まで入り込むことはなかった。東は東、西は西だったのだ。外国人地区は確かに外国だった。ソーホーは皆の国になり始めていたが、一般のロンドン人の姿がバック・ヒル、エア・ストリート・ヒル、ウォーナー・ストリートのイタリア人街で見られることはほとんどなかった。ゲットーの奥まった所やライムハウスやスピタルフィールズのオランダ人街でも同じことだった。(9-10)

また、『ライムハウスの夜』の前年に出版された自伝『ロンドンの夜』(*Nights in Town*, 1915)では、大戦前、「イースト・エンドはイースト・エンドだった——独自の法律と慣習を持ち、文明から切り離され、ピカデリーとは何の共通点もない別個の土地だったのだ」(91)とも記されている。この時点ではまだライムハウスは、外界からの侵入を免れていたのである。しかし、公共交通の発達が独自性を呑み込む。さらに、戦争の勃発によって、これまで見られなかったほどの厳しい監視下に当局によって置かれることになる。夜間外出禁止令やアルコール摂取の制限に加えて、コカインや阿片の使用は犯罪と見なされるようになる。そうしたなか、外国人居住区が存在そのものが社会的・民族的単一性を基盤とする国民国家の概念を脅かすものとなるのだ。特に中国人と白人の異人種混浴は、イギリス帝国という組織の骨格となる人種的ヒエラルキーを侵食するのである。優生学者や社会科学者や心理学者は、イギリスが身体的・道徳的退化の状態にあると主張した。大戦こそは保守派にとって、「浄化の炎」(Hoare 13)として歓迎すべきものだったのである。1916年に王立美術院正会員の彫刻家W・R・コ

ルトン (William Robert Colton, 1868–1921) は、『建築家』(*The Architect*) という雑誌のなかで、戦争が最終的にイングランドから、「オスカー・ワイルド、オーブリー・ビアズリー [……] 未来派、立体派、全てのデカダント派の小説家」(Hoare 14) といったような者たちによって広められた退廃した外国の影響を取り除いてくれるだろうと主張した。中国人移民は悪徳、麻薬、売春、ギャンブルと結びつけられ、1914年のドーラ [DORA: 戦時国土防衛法] のもと、外国人法によってますます厳しく取り締まられることになった。新聞は在英外国人を「内なる敵」と見なして攻撃し、反逆・スパイ活動・破壊行為と結びつけた。個々人の道徳的健全さは、人種の適合性および国家の安寧と相互依存の関係にあると見なされ、イギリスの防衛能力や国際的地位に欠くべからざるものだったのだ。

体制側によるこのような画一的なイデオロギーの押し付けをパークは憂慮する。戦後の1919年に出版された『あちらこちら』(*Out and About*, 1919) に収められた「チャイナタウン再訪」(“Chinatown Revisited”) のなかでパークは、1890年頃という「バラ色の時代」(43) からチャイナタウンが持ち続けてきた様々な色合いや不可思議さ、そして気味悪さを、過去形で書かねばならなくなったことを残念がる。彼は戦争と、それに伴い国民生活に国家の管理がますます強まっていく事態を非難するのである。「営利的で管理されたウェスト・エンドが帯びる精神」によって「全ての薄暗い優美なものが抑圧された。ドーラが踏み込み、かつて奇妙な楽しみへと招いていた小さな溜まり場を叩きつぶしてしまった」(36) のだ。「『チャイナタウン』というかつて喜びの香水を運んでいた言葉」に残された意味は、「中国人が住むロンドンの一区画を指す」(35) ということだけだと述べる。「チャイナタウンという魅惑に満ちた恥ずべきもの」(47) は消滅してしまったのである。

こうした状況のもと彼は、かつて法の支配の及ばなかった、周縁の多文化的で非営利的な夜の生活がもたらす不法な娯楽に反ブルジョア的な喜びを見出し、物語のなかにロマンティックに魅らせようとするのだ。彼は、『ロンドンの息子』(*Son of London*, 1947) のなかで、「ロンドンの失われた街角のあたりを長時間さまようとき、私は妖精の国にいた。そこで知ったことを私は物語のなかで伝えようと試みた」(206) と語る。彼が呼び出すの

は、決して晴れることの無い重い霧のなか、「ビンロウジ〔ビンロウの果実で、嗜好品としてキンマの葉に包んで石灰などと共に噛む〕、吸飲用阿片、フライド・フィッシュの臭いの立ち込める」(*Out and About* 42) ウェスト・インディア・ドック・ロード、コスモポリタンな喧騒、昔のメロディーを奏でる哀愁を帯びたギターの調べ、中国劇のレコードをとめどもなく鳴らす蓄音器の耳障りな音なのである。彼の「オリエンタルなロンドン」は、近づきがたいものでありながら誘惑的である。

夕刻には——ああ！——ホールでの少女たちとのダンスだ。チャイナタウンの魅惑的な1月の夕べ——お金持ちの黄色い男たち——リボンで飾った白人の少女たち、陽気で、これ見よがしで、奇妙なキスが大好きだ——虹色のランタンが今や灯され、紐に吊るされてしなやかに揺れている——喫茶店の喧騒、活気、笑い声——途方もないほど消費される食べ物と飲み物——こうした全てのことが、この祝祭に夢のように魅力的な雰囲気を与える。少女たちは今宵、これらの人々と恋に落ちて必ずや許されるだろう。スカンジナビアの船乗りたちの家庭が灯す悲しい明りは、このような時には間違はなくほとんど魅力がないものになってしまうのだ！(*Limehouse Nights* 162)

ライムハウス・コーズウェイの新年を表わしたこの描写では、読者は道徳的判断を停止し、「少女たちが今宵、これらの人々と恋におちても」、彼女たちを許すことが求められる。『ライムハウスの夜』は、一元化されたウェスト・エンドとは対照的に、イースト・エンドの強固なまでに自由で気ままな生活を描き出す。そこでは、「人々はたぶん苦役に病んでいるが、その疲れの下には、夜のほんのわずかな一瞬をも照らしてくれる喜びへの渴望がある」(*Nights in Town* 76) のだ。ウェスト・エンドの劇場は、オリエンタルな異国情緒で観客を眩惑させるかもしれないが、イースト・エンドでは通りで、「真のバカナル (true Bacchanales)」(76) が演じられているのである。都会生活に対する喜びや、ドックランズのライムハウスを無秩序の領域と見なし想像するという点で、バークはデカダンスの伝統に則っていると言えよう。

バークが描き出したライムハウスの風景は外界の道德律に照らせばイー

スト・エンドの墮落の一側面だったかもしれない。しかし、異人種混淆はそこでの生活の現実であり、時には有益なもの、破壊的なもの、またありふれたものでさえあった。それは一概に「悪徳」と決めつけられるものではなく、状況や関係者の性格によって変わってくるものなのである。パークはそれら矛盾する要素から成るものこそが人間生活の一コマであり、人間関係の真実だとして提示したのである。確かにパークは、ローマー同様、「中国人について無知であり」(*Son of London* 252)、『ライムハウスの夜』は、その地区や住民に関する知識からというよりは印象主義的な評価によるところが大きい。したがって物語には、衝撃的なリアリズムと抒情的なロマンスとが綯い交ぜになっている。しかし、それが一層登場人物の感情や策略に信憑性を持たせ、読者の想像力を喚起するのである。

パークはスラムの改革を意図していたわけでもなく、ましてや中国人移民の地位向上を図ったわけでもない。彼が作品のなかで描こうとしたのは、反権力の立場から、世の中の「暗い側面」、すなわちスラムと阿片窟に、中産階級の品行方正がもたらす息苦しさを超えたロマンティックな活力を見出したのである。黄禍論を利用しつつも、イギリス人を墮落させようとする悪の中国人の巣窟といった既成のチャイナタウン観を多くの点で転倒させたのである。結果として現出した空間は、異なる人種同士が時には親密に、時には反目しながら、問題を抱えながら共生する姿と言えるかもしれない。

そうした作品に多くの読者が魅了されたのは、そこにもう一つの抑圧された自己を見出したからかもしれない。バリー・ミリガン (Barry Milligan) は、「神聖なイングランドの炉辺の」(12-13) 神話上の対照物として、悪の巣たる阿片窟の象徴的力を論じている。エドワード・W・サイード (Edward W. Said) のオリエンタリズム論によれば、「ヨーロッパ文化は、自らを一種の [……] 隠された自己としてのオリエントと区別することで、強さとアイデンティティを増した」(3)。しかし、ピーター・スタリブラス (Peter Stallybrass) とアロン・ホワイト (Allon White) が述べているように、支配的な文化は「下部の他者にある意味でしばしば依存する。[……] それだけでなく、まるで己自身の幻想を支える性欲を掻き立てるのに、それが不可欠の要素でもあるかのように、下部を象徴的に包含する」(5・傍点

は原文イタリック)のである。したがってライムハウスは、大衆の想像力にますます力強い魔力を発揮するようになり、読者は、嫌悪と魅力という、「卑しい『下部』を排除し貶めようとする政治的な要請が、この己の〈他者〉たる下部への欲求とはからずも激しく闘う過程における二極」(5・傍点は原文イタリック)の間で揺れ動くのである。ライムハウス神話は、他の力強い象徴的な周縁物である中産階級の欲求同様、現実の社会的重要性と全く調和しなくなる。ジークムント・フロイト(Sigmund Freud, 1856-1939)の用語を用いれば、ライムハウスの中国的性格は、「古くから知られているもの、昔からなじんでいるものに還元されるところの、ある種の恐ろしいもの」(340)、「心的生活にとって昔から親しいものであって、ただ抑圧の過程によって疎遠にされた」(363-64)ものと定義される「不気味なもの(uncanny)」なのである。濃厚な中国的イメージとそれが包含する様々なエロティシズムは、結果として中国的性質に対して両義的な反応を生み出す。中国嫌いのプロパガンダに従いつつも、文化は同時にシノワズリーの魅力に取りつかれ、パークのライムハウスに読者は自らの原初への回帰と解放を味わうのである。

4. 帝国の中心イースト・エンド

中国人男性と白人女性、さらには白人男性との共生を描いた『ライムハウスの夜』を魅力的にしているのは、体制側のイデオロギーに縛りつけられることのない「カーニヴァル空間」を描き出しているからである。パーク自身が述懐しているように、確かに第一次世界大戦を境に、警察の阿片取り締まりの厳格化や、低賃金で労役につく中国人日雇い人夫や船員に対する白人労働組合の人種差別的態度に見られるように、イギリスの中国人移民に対する嫌悪は強まった。当局はイギリス人を墮落させるものとして「異質なものを」排除もしくは自分たちに同化させようとする。しかし、そうした動きは一時的な効果しか生み出さない。帝国の拡大に伴う外への移民は、同時に内への移民をますます呼び込む。交通網の発達は一異人種混淆の度合いを高める。パークが描いた「ライムハウスの世界」は単に過去のものではなく、ロンドンの未来の姿でもあるのだ。作品は、共通する文化

的基盤を失ったロンドンという都市のダイナミックな再構築の可能性を示唆しているとも解釈できるのである。パークは『ロンドンの夜』のなかで、イースト・インディア・ドックスについて以下のように述べている。

このインディア・ドックスは、世界中の他のどんなドックスにも似通っていない。門のあたりには、世界のなかで最悪の国々出身の人間のカスの姿が見受けられる。彼らは全て、皆さん方が読書や夢を通して知っている譚妄状態の太平洋から来た人々——すなわち、アラブ人、ヒンドゥー人、マレー人、中国人、日本人、南洋諸島の人なのである——このように名前を挙げるだけでもロマンスだ。ここにはテンポと高度な冒険がある。これこそ東洋特有のにおいだ。血と人種と信条の融合なのだ。それは退化したクズではあるが、いいですか、私は、ポートレースの夜に帝国から届く立派な金製品の方が好みだとは言えない。こうした輩を、恐ろしいまでに謎を秘めたロンドンの夜に、私たちのそっけない風景を背にしておいてごらん下さい。そうすれば彼らはロンドンが提供する最も素晴らしい光景となるのである。(84)

多文化の活気に満ちた都市の光景は、ホワイトホールやウェストミンスターではなく、イースト・ロンドンなのである。

そしてイースト・ロンドンこそがイギリス帝国の中心なのである。帝国やオリエントの物語はそこから始まるのだ。「中国人と子ども」の冒頭でパークは、人々は、彼が語る不運な恋と恋人たちの物語を、それが起こったラトクリフ・コーズウェイやペニーフィールド近辺だけでなく、「遙か遠く^{タイピン}の太平やシンガポールや東京や上海、さらには他の、ライムハウスの放浪の民が赴き、そしてそこから思いがけなく戻って来る陽気に輝く不思議な溜まり場」(13)でも伝え聞くと述べている。茶や綿やその他の帝国の商品の交易とともに、悲しい恋の物語もまたドックランズから広まるということ自体が、帝国そのものの物語の提喻(synecdoche)となっているのである。東と西、外国人と住民との間の複雑で断裂した、それでいて結びついた物語、人間の愛情や苦しみ^{タイピン}の新しい形の物語こそは、帝国が、時間や空間を超えて、外国の風景や見慣れた故国の風景の区別なく拡大するにつれて、帝国の人間関係の本質を表わすものとなってくるのである。そしてそれは、同時に、ロンドンの東と西の垣根をも低くする。時の経過と

ともに白人社会は、中国人に対する排除と寛容という二律背反の間で常に揺れ動きながら、共存のための新たな道を模索せざるを得ない段階に達するのである。

注

- * 引用は全て拙訳によるものであり、末尾の括弧に引用元の頁数を添えた。
- 1 例えばキャロル・ワッツ (Carol Watts) は、『散り行く花』における感情表現の戦術を論じるなかで「中国人と子ども」を取り上げ、そのメロドラマ的な特徴を分析している。彼女によれば、「中国人と子ども」の語りの戦術は観察者の距離を繰り返し危険にさらし、読者を、「人種がもたらす感情的衝撃を主として伴う感覚的攻撃の領域」(37)のすぐそばにまで近づけるのである。しかし、このパターンは他の物語にも見られるものであり、アンソロジー自体が全体として距離の消滅という効果をもたらししていると言える。
- 2 トマス・バークの収集家であるジョン・ランドル (John Randall) は、バーク未亡人で作家のクレア・キャメロン (Clare Cameron) からバークの父はアイルランド人兵士だったと聞いたと伝えている (Witchard 183)。しかしバーク自身には、1945年9月24日の『タイムズ』の死亡欄に載った「ロンドン人中のロンドン人」(7)といった表現や、同日の『アイリッシュ・インディペンデント』(*Irish Independent*)紙の通信欄で「アイルランド系ながら、彼以前の多くの人々同様、完全なロンドン人になった人物」(2)と記されていることから窺えるように、自分がアイルランド人だという意識は希薄だったようである。

引用文献

- Armfelt, Count E. "Oriental London." *Living London*. Ed. George Sims. Vol. 1. London: Cassell, 1902-03. 81-87. 3 vols.
- Burke, Thomas. *Limehouse Nights: Tales of Chinatown*. London: Grant Richards, 1916.
- . *London in My Time*. London: Rich & Cowan, 1934.
- . *Nights in Town: A London Autobiography*. London: George Allen & Unwin, 1915.
- . *Out and About: A Note-Book of London in War-Time*. London: George Allen & Unwin, 1919.
- . *Son of London*. 1947. London: Readers Union with Herbert Jenkins, 1948.
- Chaplin, Charles Spencer. "Charlie Chaplin Tells His Ambitions and His Success in

- Screenland.” *Los Angeles Herald*, 2 December 1919.
 <<https://cdnc.ucr.edu/?a=d&d=LAH19191202.2.694&e=-----en--20--1--txt-txIN-----1>> accessed 28 July 2018.
- “China Town in London.” *Review of Reviews* 22 (2 July 1900): 51.
- “The Chinese in Europe.” *Times* 22 Nov. 1879: 11e.
- “Foreign Undesirables.” *Blackwood’s Edinburgh Magazine* 169 (Feb. 1901): 279–89.
- Freud, Sigmund. *Art and Literature*. Ed. Albert Dickson. *The Penguin Freud Library*. Vol. 14. London: Penguin, 1990. 15 vols.
- Hoare, Philip. *Wilde’s Last Stand: Scandal, Decadence and Conspiracy During the Great War*. 1997. London: Duckworth Overlook, 2011.
- Lears, T. J. Jackson. *No Place of Grace: Antimodernism and the Transformation of American Culture, 1880–1920*. 1981. Chicago: U of Chicago P, 1994.
- “Limehouse Nights.” *Times Literary Supplement* 28 Sept. 1916: 464.
- “London Letter.” *Irish Independent* 24 Sept. 1945: 2.
- May, J. P. “The Chinese in Britain, 1860–1914.” *Immigrants and Minorities in British Society*. Ed. Colin Holmes. London: George Allen & Unwin, 1978. 11–24.
- “Obituary.” *Times* 24 Sept. 1945: 7.
- Seed, John. “Limehouse Blues: Looking for Chinatown in the London Docks, 1900–40.” *History Workshop Journal* 62 (2006): 58–85.
- Stallybrass, Peter and Allon White. *The Politics & Poetics of Transgression*. Ithaca: Cornell UP, 1986.
- Wade, George A. “The Cockney John Chinaman.” *English Illustrated Magazine* 23 (July 1900): 301–07.
- Watts, Carol. “Adapting Affect: The Melodramatic Economy of *Broken Blossoms*.” *Film Studies* 3 (2002): 31–46.
- Witchard, Anne. “Thomas Burke, the ‘Laureate of Limehouse’: A New Biological Outline.” *English Literature in Transition: 1880–1920* 48 (Jan. 2005): 164–87.

図版出典

- 【図1】 “A Chinese Shop (Limehouse),” illustration for “Oriental London,” by Count E. Armfelt in *Living London*, ed. George R. Sims, vol. 1, 1901, p. 82.
- 【図2】 “A Chinese Shop,” from *Wonderful London* 22, 18 Jan. 1927, p. 1013. John Seed, “Limehouse Blues: Looking for Chinatown in the London Docks, 1900–40,” *History Workshop Journal* 62 (2006): 61.
- 【図3】 Portrait of Thomas Burke. 1931. <<https://www.londonfictions.com/thomas->

burke-limehouse-nights.html>

【図4】 Mahlon Blaine's illustration for "The Chink and the Child," *Limehouse Nights* (New York: McBride, 1926).

【図5】 Lilian Gish and Richard Barthelmess in *Broken Blossoms* (1919). <<https://fumanchucomplex.wordpress.com/2013/10/02/yellowface-film-review-2-broken-blossoms/>>

——大阪市立大学教授

Summary

Narrating Chinatown: The Seduction of “Oriental London”

Takanobu Tanaka

The Chinese who settled in London's East End formed Chinatown in the second half of the 19th century. Despite the town's small size, the British regarded the Chinese as a cause of depravity, for the former, who had been tormented by guilt since the Opium War, were frightened at the reversed invasion by the latter, that is, the Yellow Peril. Several aspects of Chinese men's behavior led to wide concern. In addition to opium taking and gambling, their sexual relationships with white women became a serious problem. But at the same time, some writers viewed such miscegenation affirmatively and considered Chinese men to be respectable people blending into the local community. These conflicting attitudes were naturally reflected in popular literature. While Sax Rohmer's tales of Fu Manchu reinforced contemporary fears with his evil “Chinamen” whose interest in white women is part of their fiendish yellow plot to destroy the West, Thomas Burke's collection of stories *Limehouse Nights* (1916) invests London's Chinese Quarter with romance through love relationships between Chinese men and white women. “The Chink and the Child” is particularly famous for this. But it is also true that many other stories delineate various feelings such as hatred and revenge between the two parties. Then what do those intimate and antagonistic relationships mean as a whole?

In exploring this, the fact that the book was published during the First World War must be noticed. When the authorities concerned strictly

curtailed civil liberties, the very existence of foreign quarters threatened the idea of a nation-state based on social and ethnic homogeneity. Under these circumstances, Burke found anti-bourgeois pleasures in the multi-cultural and non-commercial nightlife of a periphery once exempt from the rule of law and revived them in the book's blend of shocking realism with lyrical romance. As a result, in the presented spectacle, different races cohabit even though they have problems. The stories can be said to suggest a possibility of dynamic reconstruction of the metropolis with no common cultural ground. It is the stories of complex, fractured unions between East and West, native and aliens, the stories of new forms of human affection and human suffering, that indicate the essential human relationship of empire as it expands itself across time and space, across alien and familiar landscapes. As further time went by, white society was to enter a stage of groping for a new way of coexistence, vacillating between exclusion and tolerance of the Chinese.